

『琅』二十八号への手紙②

# 「体罰考」(浦野裕司)を読んで

中山京子

おはようございます。

宗内先生、「瑯」No.28を送っていただきまして、どうもありがとうございます。昨日夕刻に届きました。早速、「イスラム国」の暴虐は・・・と「体罰考」を読みました。

胸が痛みました。涙がこぼれました。今は時間がないので、いずれまたお話ししたいと思います。

4月に吹雪くほどの雪が降ったかと思えば、ここ数日の夏日。熱や咳の風邪、溶連菌やインフルエンザも再び流行っています。先生は新年早々、やっかいな風邪を召され、ご快復まで時間を要した様子。この寒暖差で体調も崩しやすいかと思います。

どうぞお気をつけてくださいね。

取り急ぎ、お礼まで。

5・1 中山京子

中山京子様

早速にお返事戴きありがとうございます。こうして、『琅』へのお返事を戴くと、本当に嬉しく、活力が出てきます。たった今、庭の梨の实の小袋掛けを中断して、書斎にもどったところでした。お茶を一杯飲んだら、また作業です。おかげで元気が出ます。このメールもまた、『琅』への手紙に載せさせて下さい。

とりあえず、御礼まで。

5・1 宗内 敦

宗内 敦先生

ゴールデンウィークも今日で終わりですが、先生はいかがお過ごしでしたか？ 5月1日にいただいたメールでは梨の小袋かけをなさっていた様子。お元気で果樹のお手入れをなさっていたようで、お姿を想像して、嬉しく思っております。お返事をいただきながら、その旨をお伝えせず、また、「琅」の字の変換ミスで「瑯」になっており、大変な失礼をいたしました。申し訳ございませんでした。

”「琅」への返事”については、どうぞお使いください。私の方は、家のちよっとしたリフォームのために片づけをしておりました。子ども達の勉強部屋の床が畳であったのを、フローリングに替える工事です。工事は来週ですが、部屋の中すべての物を移動しなければならず、完了するまでに3日もかかってしまいました。物が無い部屋というのはたとえ6畳間でも広く感じます。作業をしながら「人が生きていく」ということは荷物が増えていくことだ…」な

どとつまらない事を考えておりました。

さて、正月以来、「イスラム国」による日本人質殺害や、イスラム過激派によるテロ事件などの痛ましいニュースが続き、さらに、身近なところでは、川崎市の中学1年の少年が殺害され、3人の少年が逮捕された事件や、最近では千葉県で18歳の女性が生き埋めにより殺害されるという事件が起きました。これらのニュースを聞きおよび、悲しみと怒りで憤っていました。被害者一人に対し、加害者側には数人が加担しています。

ふと思いついたのは「冷淡な傍観者」です。主犯格の者に加担しないと、自分に危害が及ぶと考えたのか？ 誰かが止めるだろうと思ったのか？ 数人加わっていた者の中に誰一人「やめろ！」と叫ぶ者はいなかったのか、助けを求めに走る者はいなかったのか？ と疑問に思います。人ひとりが殺されようとしている状況下で、「本当に殺したりはしないだろう」という楽観だったのか、「自分が直接手を下しているわけではない」という傍観者の感覚だったのか(？)。自分の息子達とたいして変わらない年齢の少年・青年たち。いったい何がこの者達の心を狂わせてしまったのだろうと思います。宗内先生の評壇「イスラム国」

の暴虐は・・・」を読んだ時、この事件に関わった少年・青年たちも、何かに「ひたすらに耐え、いつかその鬱憤を晴らす機会を探し」ていたのだろうか？」と思い、根底に潜む原因は何であるのかと思いました。

先生は評壇の中で、「民族、価値観、文化の違いはあっても、誰しも、幸せに生きたい、幸せになりたいと思っている。人の思いは、皆同じだ。その思いが根底から打ち砕かれたとき、人はその鬱憤を内にこもらせて心を病むか、あるいは外に爆発・発散させて、せめてものを立てる。」と書いていらっしゃいました。幸せに生きたいと願う心を打ち砕かれて心を病んでしまった例が、浦野先生が書かれていらした「体罰考」の中で紹介された青年であると思いません。

小学校の担任教師から受けた虐待が原因で精神を病み、入院を繰り返しながらも、自らを再生させたいと願う、ペンネーム春日部さんの私小説を読み、私は泣きました。教え子に対し執拗な人格否定や体罰を加える者が、何で「教師」であり得るのだろうか！と憤りました。どういふつもりで付けたのかわからないが児童の心が傷つくようなあだ名を付ける。教師がそんなことをすれば、小学3年生位の児

「登校児童に手厚い親切な教師」を演じていたのでしよう。父親にもこの非常事態を信じてもらえなかった健二の、完全に折れてしまった心と思うと、悲しくてたまりませんでした。

春日部さんは自分のつらい経験を小説にすることで昇華を図っており、これが成就して過去の悲しい出来事乗り越えて、まだ20代だということですから、これからの人生を生きなおして欲しいと私は心から願います。一方、この小説に登場した石山先生（「先生」などと呼ばれたいくない人ですが）には、人の一生を狂わせた、殺人にも等しい行為であったと反省させる罰を与えたいと感じました。今もこの人は教師を続け、第2、第3の春日部さんを生み出してしまっているのでしょうか・・・もしそうであるなら耐えられません。法の場へ訴えられないのでしょうか？

私は幸い、このような横暴な教師が担任だったことはありません。引つ込み思案であった私の良さを認め、褒めて自信を与えてくれたさつたばかりです。しかし、正直なところ、評判の良いくない教師、体罰をふるう教師や「内申点を下げるぞ！」などとあからさまに脅す教師は周囲にいました。私の兄もその被害者の一人で、中学生の時、授業中

童はいっしょになって、おふざけ気分で真似することも想像がつかず。子ども達は「先生のすることは正しい」と思っているでしょうし、保護者だって、教師を信頼していると思います。だから、春日部さんの父も「先生がそんなこと、するわけがない。」と言ひ、子どもが学校に行きたくない原因は我が子にあると思つたのでしよう。

それにしても石山という担任の暴虐ぶりは「イスラム国」に通ずるものがあると思います。見せしめに誰かを貶め、誹謗中傷のみならず、「公開処刑」と称して児童を殴る暴力。それをクラスの生徒に見せることにより、自分には逆らえないと見せつける行為。教師の横暴が自分に向くのを恐れ、クラスメイトの中にも教師に加担する者が出てくるし、健二に関わらないようにする「傍観者となる者もいて、誰も苦しんでいる健二を助ける勇気も持てなかっただろうと思います。正しくない行為が当たり前のように行われ、だれも「間違っている」と公言できない社会が作られています。何か異変に気付いた同僚教師がいたとしても、石山は体裁を上手に繕ひ、クラス児童にも「決して口外するな！」という脅しをかけていたに違いありません。不登校になった健二に電話をしてきたり、家にも来たりして、「不

少し反抗的な態度を取ったらしく、兄は担任からピンタをくらいました。それが原因で頬に水が溜まって腫れ上がり、最終的には9時間に及ぶ外科手術を受ける事態になりました。父は体罰には憤っていましたが、結局反抗的だった兄に非があるととして、現代よくあるような「教育委員会に訴え、学校長が謝罪」というような事にはなりません。私が子どもの頃は、「愛の鞭」として体罰容認の風潮が教師側にも保護者にもありました。

私の長男は、この春、地元にある県立T高校へ進学しましたが、小学校でも、温和で公平な良い担任に恵まれてきました。が、中学校でも素晴らしい先生方に恵まれました。特に中学3年の担任でY先生（英語担当・男性教諭）は素晴らしい方でした。卒業後の最後の授業で、「一人ひとりをみんなに伝えようということになった時も、どの生徒も「過ごした3年間で楽しかった。3年C組のみんなが好きだ。Y先生が大好きだ。」と言ひ、担任のY先生も生徒に向かつて臆面もなく「大好きだぞ！ 伝わっているか？」と言ひました。感動の涙に潤む目でY先生を見つめ、先生の言葉に笑みを返す生徒たち。私はこの様子を担任が立つ側の廊下から参観していましたが、この3年間でどれだけ

息子達にとって幸せだったかを、あらためて知った思いでした。保護者の多くが涙し、私も感動したのでした。

Y先生は授業のほとんどを英語で行なう方で、ALT(大月市で派遣するネイティブの英語講師)が授業に入る時も流暢な英語でやりとりをします。とても指導力のある先生であると思います。卒業生の保護者からも、「Y先生なら英語力も身に着くし、クラスもまとまるので大丈夫」と聞き及んでいましたし、「下の子も是非Y先生に担任を持ってもらいたい」と保護者の間でも非常に評判の方です。Y先生は、受験に向かう生徒に「勉強しろ」というためには自分が学習しなければいけないと言う方で、長期の休みには留学していましたし、学校での仕事を終えてから3〜5時間は自分の学習を続けていると話していました。TOEICで900点超えを目指し、ずっと努力を続けてきて、息子達を卒業させる時に「目標を達成できた。」と報告し、証明してみせました。授業参観を何度か見に行っていますが、道徳の授業も、英語の授業も、本当に魅力的なもので、私は「自分が今、中学生で、この中にいられたら良かったのに・・・。」と思うほどでした。長男のデイリーノート(授業の準備を書いたり、一日の反省や感想を書く生徒のノ

ト)を見た事がありますが、毎回必ず一言が添えられ、激励のメッセージあり、アドバイスありと、本当に細やかな配慮がこのノート一つにもありました。1、2年時の担任だった方も、長男は好きで、やはり素晴らしい先生でしたが、デイリーノートには「見ました」という証拠の赤丸ひとつがある程度でした。中学校の先生はだいたいこんな感じではないかと思えます。一方Y先生は、教室の壁に貼る掲示物の内容も豊かで、生徒の活動の写真や、そこにたくさん言葉が添えられており、中学校のしかも男性の先生とは思えない細やかさでした。いま時の言葉で言うなら、「女子力あり過ぎ(笑)」です。卒業式には、手作りのアルバムをいただきました。黒の色画用紙に、1年生から3年生までの集合写真や学校での活動の写真が貼られ、様々なシールや色ペンでデコレーションしており、それが数枚に及びました。表紙をめくると、最初にあったのは、長男が1年生の時の個人写真でした。クラスの生徒、ひとりひとり違う、それぞれへのアルバムであったのです。非常に忙しい時期に、卒業する教子の子のすべてに渡ってこれほどまでの心遣い、本当に感動し、感謝したのでした。

宗内先生がおっしゃる「権威のある教師」というのはY

先生のような方をいうのだろうと思いました。「教師が努力する姿を生徒が見て、生徒も応える。」この先生に認められたいから頑張る、この先生を喜ばせたいからクラス一致団結する。「ひとり」を作らない、みんなは「ひとり」のために!」という目標に、生徒一人一人が気をつけ、努力する、そんな雰囲気があるクラスであり、学年でした。

そんな長男の学校生活を見てきましたから、よけいに「体罰考」の小説が心に刺さりました。

先ほど、私自身は横暴な教師が担任だったことはいないと書きましたが、以前お話ししたことがあったでしょうか、高校1年の時の学年主任で副担任だった教師のことを。担任が学年半ばで産休に入り、副担任の体育教師 K先生がホームルームを担当することになりました。ある日、廊下でそのK先生が私を呼び止めるので何かと思つて近寄ると、「武田、おまえ、頭悪そうだな!」つて言ったのです。現在でも中堅上位校である都立高校で、確かに難関校に行けなかった私は能力がなかったかもしれないけれど、当時1学年9クラスある学年で7位の成績だったので、「どういう意図があつて、何を見て私を『頭悪そう』と評価したのか?」と思いました。毛嫌いしか起こらず、何も言い返さ

ずにその場を去りました。私はこの悔しさをバネにして、また学習も嫌いではなかったので「いつか見返してやろう」と思いました。1年の終わりの期末テスト後、またK先生に声をかけられましたが、この時先生が言った一言が「お前つて成績良かったんだなあ」とした。何の謝罪の言葉もありませんでしたが、「認めさせた!」と思ひ、私は非常に態度悪く、先生に対して鼻でフンと笑つて過ぎ去りました。

今年3月、その高校1年からの親友と亀戸天神の梅まつりを見に行つたついでに、卒業した母校を訪ねてみることにしました。高校のすぐ近くに同窓会館があり、掲示板を見ていたら、私たちに気づいた事務局の方が中に招き入れてくれました。会館内を案内していただいたり、卒業アルバムを見せていただいたりして過すうちに、同窓会会長が事務所に、昼休みから帰つてきました。その方、私に「頭悪そう」と言つたK先生なのです。自分の小学生から大学生まで、学校生活を思い出す時、唯一嫌な思い出であつたのがK先生の存在で、一緒に行つた親友もK先生に理不尽な事でビンタをくらつた経験があるため、同様にワーストNo.1の先生であり悪口しか出てこない相手なのですが、32

年ぶりに会ってみて、80歳を越えて同窓会のために張り切っておられる先生の姿を見たら、不思議となつかしかったです。K先生に対する嫌悪も怒りも、何もなかったのです。「お前ら、なつかしいなあ！」と言って豪快に笑うK先生を見て、当時と変わらない元気が嬉しかったです。帰り道、親友と話したのは「当時はすごく悔しかったけれど、ある意味、K先生のおかげで私たち奮起したよね。大学進学希望が叶ったし。」ということでした。4年制の大学に進学する女子は母校では希少でした。卒業した時私は郵政省に合格しており、公務員になる予定でした。採用がすぐになく、数か月後「政府統計局」という所での採用通知が届きましたが、進学したいことを理由に採用を辞退しました。1年後、友達は埼玉大学、私は都留文科大学に入学。中堅母校からの国立進学者は本当に少なく、都留文へは確か10年ぶりの入学と言われました。まったく、K先生のおかげもあって（？）、私は都留文で恩師である宗内先生のゼミの一員になりました。総じて本当に幸せな学生生活であったと今思い返しても、しみじみとそう感じます。

長々とまとまりのないお便りになってしまいました。

く、乱雑に汚れきっていた。一瞬呆れ顔で「先生、これはひどい、ちょっと。甘やかしすぎてはいませんか」と言うやたちまち、挨拶もそこそこに整理・整頓を始め、雑巾がけをしてくれた。確かに、甘やかすばかりで、年々甘えん坊になってくる学生達の変化について行けなくなっていた。やがてレポートを出さず、卒論を出すことに失敗する学生を生み出し、卒業させられない学生をつくり出すようにさえなった。加えて、大学学長等からの私に対する不埒な名誉毀損事象が起きた。誘因はいずこにあるかと、教師失格である。とは言え、ついでに述べると、私は時経た今でも、私を誹謗中傷した彼らを許してはいない。

それに比べ、本稿に見える中山さんの人格・人柄こそ見事である。許しがたき仕打ちを受けたK先生を時経て寛容にも許している。大学卒業後の様々な仕事、そこでの多様な人間関係、諸々の体験の積み重ねからも涵養されたのではなかろうか。向後、NPOなど広く社会的活動に関わる組織に関与するなどして、様々な形の弱者、不適応者を援助する臨床家への道、そうした社会貢献をも密かに期待させられた次第である。

宗内 敦

送っていただいた「琅」によって、様々なことを考え、思いつくこともたくさんありました。感謝しております。半袖になるような夏の兆しがあつたかと思えば、寒くなり、まったく体調管理に苦慮する毎日です。

宗内先生もどうぞお体に気をつけてくださいね。それでは。

5・6 中山京子

中山京子

88年3月、都留文科大学卒業後約3年間、東京都江戸川区役所児童館の音楽講師、児童指導主事を務め、結婚して山梨県大月市に。産休代替教員等した後、夫の海外研修（日本人学校勤務）に伴ってシンガポールに渡り、当地での国立博物館で日本語ガイドのボランティア。3年後帰国、文化財研究所の発掘作業に従事した後、学校法人猿橋幼稚園の事務職（現在）につく。

卒業後どれほど経った時だったろうか、一度だけ、大学（都留文科大学）の研究室を訪れてくれたことがある。その折、室内はまるで学生たちの気ままな休憩所の跡宜し